

こどもが真性包茎と言われ

真性包茎とは、陰茎の包皮（おちんちんをつつむ皮）を押し下げても出口が狭く、亀頭が見えない状態のことをいいます。生まれたばかりの赤ん坊はほぼ全員がこの状態です。ユダヤ人、アラブ人、ある年代までの韓国人は習慣的に包茎手術を受けていますが、日本人には小児期に包茎手術をする風習はありません。日本人の男の子は陰茎の発育につれて思春期がすぎるまでに少しずつむけるようになっていくのが普通です。

治療が必要な包茎とは？

- 1) 思春期以降の真性包茎 日本でも手術の対象と考えられており、保険診療の対象です。
- 2) 嵌頓包茎 むきにくい状態の包皮を無理して剥いた場合、もとにもどらなくなることで、早期に戻さないと皮膚がむくんで戻せなくなりますので、判明したらすぐに泌尿器科を受診してください。戻せない場合には手術が必要です。
- 3) 硬化性包皮 包皮の先端の皮膚が硬くなり、成長にともなって剥けるのに支障がある場合で、勃起時に突っ張りがでます。
- 4) 埋没陰茎 体表に露出している包皮がすくなく陰茎が体に埋まり込んだように見える状態です。成人までこの状態がもちこすことは多くはないと思われませんが、形態的なコンプレックスのもとになるので、小児期に治療を希望される親子もおられます。通常の包茎の手術では治療できないので、泌尿器科の中でも、小児を専門にしている施設を受診してください。

治療が必ずしも必要のない包茎とは？

- 1) 思春期までの通常の包茎 日本人の文化的背景では、この時期に手術を急ぐ理由はそれほどありません。
- 2) 亀頭包皮 包皮が炎症を起こし赤く腫れあがる状態です。手術や包皮を剥く指導をされたりする理由となっていることがしばしばあります。治療しなくとも自然軽快することも多く、包皮が剥け始める3-6歳ころに頻発

しますので、剥けて行く過程をみている可能性もあります。抗菌薬治療が行われますが、抗炎症剤のみ、あるいは経過観察のみですむことも多いです。